**テーマ「人類の進歩と調和」について**（「日本万国博覧会公式記録１巻」から抜粋）

資料４

わが日本万国博覧会は「人類の進歩と調和」を「統一主題」として採択したが、その根本精神は「基本理念」に示されている。これをさらにくわしく説明したい。

19世紀に誕生した万国博覧会は、「進歩」を指導精神としてきた。新式、新型の機械がいわばそこでの主役であった。たとえば電話機や蓄音機や自動車が博覧会を通して一般の人々に認められ、実用化されていった。科学技術の発達は、人類の生活の全般にはげしい変化をもたらしたが、過去の万国博は、そうした変化を「進歩」と見て、もっぱら讃美する立場にたってきた。私たちも、もちろんこの伝統をうけつぎ、この万国博を通して、「進歩への努力がいっそう強められることを希望するものである。

しかしながら、第2次世界大戦後に生きる私たちは、技術文明の進歩が人間の生活を改善すると同時に、そこにさまぎまなヒズミをもたらしていることに眼をふさぐことはできない。たとえば、交通機関の発達は、旅行の便宜を増すとともに、反面、自然の破壊、騒音などという公害、人命の損傷の増大をもたらしてきた。また、原子力という新しいエネルギーが人類の未来を明るくも暗くもする可能性をもっていることはいうまでもない。文明の進歩にもかかわらず、世界の各地域にはなお大きな不均等がのこり、さまぎまの不幸になやむ人々が決して少なくはない。人類の理想とする進歩は、こうした弊害や不調和を伴わない「調和的進歩」でなければならない。人間性の尊重を通して、調和をめざす進歩の精神を、私たちは万国博の会場で実現したいと考える。

「調和」ということばは、芸術においては均衡のとれた美をあらわし、哲学、宗教などにおいては、いろいろな意味に使われているが、要は、理解と寛容の精神であって、東洋思想の中心をなす「和」の心にほかならない。

和とは、自己を捨てるのではなく、しかも自己に固執せずに、他人の身にもなりうることである。いかに正しいものであろうとも、自分の考えを他人に押しつけはせず、他人が別の意見を持つには理由があるに違いない。その理由を考えてみようとする余裕を失わないのである。

私たちは、日本万国博覧会に新奇・驚異・豪華・統一の印象をあたえるだけでなく、世界にはさまざまの文明があることを和の精神によって認めたいと思う。したがって、不調和をなくする方法そのものも、画一的ではなく、さまざまであってよいと考えるのである。

この万国博覧会に協力参加される各国は、それぞれの文化の伝統の上に立って「進歩と調和」を解釈し、その解釈に基づいて出品の具体的方針を立てられるように希望する。

各国の出品の選択は自由であるが、展示されたものが最も大きな効果をあげ、また、「人類の進歩と調和」という統一主題の開花に貢献できるためには、調和のある配置がとられることが望ましい。そのため、私たちは、「統一主題」を「基本理念」の考え方に従って四つの「主題」（サブ・テーマ）に展開し、さらにこれをそれぞれいくつかの「項目」にわける。出品者が次に掲げる「主題」ないし「項目」に従って展示の構想をたてられることにより、博覧会全体が輝かしい多様性のうちに調和のある統一を生み出すように希望するものである。

〈第1主題〉 よりゆたかな生命の充実を

このサブ・テーマこそ「統一主題」展開の鍵である。このサブ・テーマは、生命の本性を明らかにするとともに、それをおびやかす心身の病いとのたたかいの努力をとりあげる。

項目 その例示

生命の科学 （生命の起源、生命の神秘など）

病気とのたたかい （医療、防疫、薬など）

心の科学 （心理、精神の発達など）

健康の管理 （出産、育児、保健、体育など）

生きるよろこび （趣味、創造活動など）

〈第2主題〉 よりみのり多い自然の利用を

第2から第4までのサブ・テーマは、生命をもつ人間が生活においてかかわりあうあらゆる対象を三分してあつかう。この第2のサブ・テーマは、人間と自然との関係をあつかう。

項目 その例示

生命による生産 （養殖、牧畜、栽培植物など）

大地の利用と改善 （治水、開拓、国土美化など）

資源の開発と保全 （エネルギー、水資源開発など）

海洋 （海水、海底資源の利用など）、

地球と宇宙 （天文、気象、極地、宇宙開発など）

〈第3主題〉 より好ましい生活の設計

第3のサブ・テーマは、人間が物質に加工して造りだしたものと、生活主体者としての人間とのかかわりをあつかう。

項目 その例示

よそおい （繊維、衣類、ファッションなど）

食生活 （食料、栄養、料理など）

生活空間 （建築、住宅、家具など）

交通と運輸 （陸、海、空の乗物、旅行など）

都市 （都市計画、公害の防止など）

道具と機械 （工作機械、オートメーション装置など）

時間 （暦、時計、スピードヘの挑戦など）

〈第4主題〉「より深い相互の理解を

第4のサブ・テーマは、ふたたび人間にもどり、人間と人間との関係をとりあげる。生きるとは、社会の中に生きることである。

項目 その例示

言語と情報処理 （文字、本、翻訳機械など）

報道と通信 （ジャーナリズム、電信、電話など）

教育 （学校、教材、教具など）

社会の制度と慣習 （家族、道徳、冠婚葬祭など）

芸術とその鑑賞 （美術、工芸、舞台芸術など）

国際間の理解と協力 （海外技術の協力、文化交流など）